

旧大乘院庭園の調査（平城第 365 次）

興福寺の南方、現在奈良ホテルが建つ朝香山の南麓に、旧大乘院庭園があります。大乘院は興福寺の門跡寺院で、その庭園は室町時代の尋尊大僧正による修築後、改修を経ながら江戸時代末に至るまで南都随一の名園として栄えました。今回の調査は、庭園の中心に位置する東大池の西北隅と西南隅を対象に、10月から開始し、現在も継続中です。

このうち西南隅の調査区からは意外なものが出土しています。近代土管の初出とされる陶管で、大乘院の池水を外へくばる暗渠に用いられていました。この陶管は、明治5年（1872年）、愛知県常滑の製陶業者・鯉江方寿が、お雇い外国人・R.H. プラントンの依頼により、横浜居留地の下水道用につくったものです。しかし納入後、規格外とされて全数不合格となり、地元の資材商に払い下げてしまいました。東京の新橋停車場跡地からはこの陶管がまとまって出土しており、近隣の土木工事にすぐに流用された様子がうかがえます。一方、鯉江方寿は陶管の改良にとりかかり、翌年には新型の陶管を開発、これが全国へ普及する近代土管の原形となりました。

このように、この陶管は近代土管の試作品ともいえるもので、その使用は、本格的な近代土管が普及する以前の明治5年から数年の間と推察できます。この陶管がどのような経緯で大乘院に持ち込まれたのかはわかりませんが、明治時代末期に国有鉄道法により、偶然にも大乘院が新橋停車場の所有者であった鉄道院（現在のJR）の所有となることと、不思議な縁を感じずにはいられません。

調査は12月末まで継続する予定です。調査終了後には、あらためて調査の全容を報告したいと思います。（平城宮跡発掘調査部 金井 健）



横浜居留地下水道用の陶管を用いた暗渠（西南から）

法華寺境内の調査（平城第 363 次）

平城宮の東側に隣接する法華寺では、新たに防災施設を敷設するために、事前調査として8月より発掘をおこなっています。調査区が境内をほぼ全周するかたちでめぐっているため、調査開始より4ヶ月たった今でも調査が続いています。

調査区の幅が1mと狭いため、遺構の状況がわかる範囲も限られていますが、それでも興味深い成果があげられつつあります。

例えば、本堂の北東にある光月亭の周囲では、かつて建てられていた建物の基壇が見つかりました。この基壇の時期は中～近世と考えられます。

また本堂と鐘楼の間では、近世の池の痕跡が検出されたほか、建物の柱根が2本も検出されました。いずれも直径60cm近い立派なものです。これらの柱根の位置から、かつてこの場所に南北4間、東西7間の建物が建てられていたことがわかりました。ただし、この建物の時期についてはよくわかりません。

11月以降は本堂の南面や、鐘楼周辺の調査になりますが、本堂の南面にもかつて建物が存在していたことがわかっていますので、今後の調査で新たな情報が得られることが期待されます。

（平城宮跡発掘調査部 林 正憲）



調査区全景（左下が柱穴）